
魔法少女と、よみがえる銀色の流星

ドクペ(チェリー味)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女と、よみがえる銀色の流星

【Nコード】

N3419Y

【作者名】

ドクペ（チエリー味）

【あらすじ】

その宇宙での役目を終えた銀色の流星と呼ばれた巨人は、幾多の次元を超えて、異なる宇宙へと旅立つ。

巨人の役目は、？光ある者？と共に歩み、絆を紡ぐこと。

その者が、道に迷うならば力を課し、貸すこと。

たとえどれほどの？恐怖？と？絶望？が身を蝕んでも、？絆？の力を信じるのが大切なのだと伝えること。

？恐怖？と？絶望？から、？希望？と？絆？の次のステージへ歩みだす手助けをすること。

それこそが、ウルトラマンの役目なのだから

銀色の流星がウルトラマンと呼ばれた日（前書き）

ULTRA N PROJECTと魔法少女まどか マギカの設定
とかお話を借りたオリジナル展開です。

銀色の流星がウルトラマンと呼ばれた日

かつて戦いがあった。

この宇宙とは違う、次元の壁を隔てた先にある別の宇宙に存在する地球。

別世界の地球人類は、スペース・ビーストと呼ばれる謎の宇宙生命体と人類の存亡をかけて争い、血を流していた。

スペース・ビースト全てを生み出す原因となった、最初に地球を襲った宇宙の獣。

ザ・ワンと呼ばれたそれを、地球の人々と共に倒した巨人が居た。

？光の巨人？と呼ばれたその存在は不完全な状態であり、適性のある地球人とある程度同化することによって、辛くもその強大な存在を討つに到った。

しかし皮肉にも、倒されたザ・ワンが微かに残したその爪痕が、再び人類を苦しめ、恐怖させることとなった。

？光の巨人？は自身の力を一度使い果たしてしまい、しばらくの眠りに着いていた。

人類は、かつて自分たちを救ってくれた巨人の居ない僅かな時のなかで、自らその記憶を封じてしまった。

巨大で恐ろしい姿のザ・ワンと対峙し、同じく巨大だがザ・ワンと

正対の姿を持ち、生命の力強さを思わせる真紅の体躯と銀の甲冑を纏ったような？光の巨人？の姿を人々は最後まで見届けた。

ザ・ワンを討ち倒すその最期まで人々は願い、奉り、子供たちはその甲冑のような銀を夕日に煌かせ、赤く染まった大地にそびえ立つ英雄^{ヒーロー}を目に焼きつけ、声援を送り続けた。

その姿が消え去った後も、確かに人々はその巨人との？絆？を感じていた。

やがてその英雄^{ヒーロー}のほとぼりが冷めた人類は、世界の秩序を維持するために、闇夜のなかで、影のようにザ・ワンの遺した爪痕と戦い続けていた。

影で、静かに人類を守り続けていた彼らだが、やがて彼らだけでは立ち向かえないほどに強力なスペース・ビーストが現れた。

そして、時を同じくして現れた存在があった。

かつて地球人類を守った、？光の巨人？が力を取り戻して地上に再び立ったのだ。

過去の？絆？を自ら忘れた人類と、？光の巨人？と同化し、巨人に変身する適能者^{デュナミスト}の絆は最初、ゼロに等しかった。

人類は巨人もまた強大で危険な存在だと敵視していたが、やがて適能者^{デュナミスト}の行動が認められるようになった。

全ての元凶であった？闇の巨人？を討ち果たすころには、記憶を封じた人類は、再びその？絆？を取り戻し、かつてザ・ワンと戦った

ように人々の声援のなかで、？光の巨人？は戦った。

再び、人々に。子供たちに。

その？名？で呼ばれて　　そう、ウルトラマン超人と。

銀色の流星がウルトラマンと呼ばれた日（後書き）

誤字やその他色々教えたりしていただけると幸いです。

見滝原に舞い降りた銀色の流星

その流星は宇宙空間を駆けていた。

赤に眩しく輝き、その速度は過ぎ行く恒星間で残像を残し、尾を作るほどだ。

流星には意思がある。

この宇宙に来る前の宇宙で、彼は高度な知的生命体に「光の巨人」とも「超人」とも呼ばれた。

光という概念を持つ数々の知的生命体の活動を見守り、時に手を差し伸べてきた。

その中で、彼が強く記憶に遺しているのは「地球」という名の青く、美しい星に住む「人類」との戦いの記憶だった。

この宇宙に来る前の宇宙で、もっとも熾烈な争いを広げた場であり、もっとも強き絆を築き、その前の宇宙の更に次元を一つ隔てた先にある宇宙で遺した因縁に、決着をつけた場でもあった。

彼の中でその記憶は鮮やかに、暖かな生命の鼓動を感じさせる血のように全身を巡り、次なる光へと繋がっていることを確信させるものであった。

？赤い流星？はただ宇宙の流れに身を任せ、次元を超えて消費した自身のエネルギーをゆっくりと、静かに眠るように回復させつつ、この一つ広大な宇宙の海を漂い、放浪していた。

しかし彼の安らかな安息は、突如として現れた？青の流星？によって破られた。

？青の流星？は変則的にその青い尾を宇宙に煌かせ、？赤い流星？と同じ　いや、それを上回る速度で宇宙を駆けていく。

？赤い流星？は、この？青い流星？がどんな存在なのかを知っていた。

なぜならば、それは前の宇宙で彼が争い続けた存在　？スペース・ビースト？に他ならなかったからだ。

彼ら？スペース・ビースト？と呼ばれる存在は、高度な知的生命体に生まれる精神の情緒の中ある光と対極に位置する闇を起源とし、それを喰らって勢力を増やし、進化する。

この世界に無数にある宇宙のなかで、？スペース・ビースト？と戦わなかった宇宙は少ない。

また？スペース・ビースト？の存在しなかった宇宙には、高度な知的生命体の存在が確認されなかった。

まさしく心在る者の影そのものであり、それこそが？スペース・ビースト？の本質だった。

？赤い流星？と？青い流星？は互いに絡み合い、時に接触し衝撃派を生んで、過ぎ去った周辺に浮かんでいた小惑星を形も残さず消滅させていく。

力がまだ完全に回復していない？赤い流星？は決着をつけられず、追いつがるようにして？青い流星？と衝突し、螺旋を描いて永く争い続けた。

そして二つの流星が疲弊しきった時、？赤い流星？は見た。

その懐かしい星の輝きを。

暗く、どこまでも深遠な宇宙空間のなかで、ほのかに青く輝く、かつての戦友達が住まう惑星を。

ああ、再び還ってきたのか。

この世界にも、この青く美しい星があった。

？赤い流星？が引いていた赤い尾は、徐々に色が薄れその色は銀に強く輝きを放ち、併走する？青い流星？にとりついて、大気のを抜けてゆっくりと落ちていく。

大気のを抜けたちようど、？青い流星？は輝きを失って燃え尽きるように消え去った。

？銀色の流星？はそのままゆっくりと降下していき、とある地へと落下した。

そして？銀色の流星？が落ちる場に、一人の少年が居るのを彼は視た。

その瞬間、彼は全てのエネルギーを使い果たして、深い眠りに墮ちていった。

少年は下校途中で、十字路で信号が変わるのを待っていた。

目の前を走り去っていく車の走行音が、朦朧とした意識のなかで水面に滴り落ちるように、やがて消え去っていく。

なぜ僕は生きているのか。

生きていなければならない理由なんて無いのに、ただ周囲に与えられ続ける価値観に流され続けて、思考停止して生きてきた。

もういいのではないだろうか。

少年はそう考えた。

父と母に、利巧で賢い息子になって欲しいと、様々な習い事を押し付けられ、それをこなしてきた。

しかし成績は結局、どれだけいっても凡人のそれと変わることはなかった。

自身のやる気の無さと、それを自覚して諦めているのに、どうして成績が伸びようか。

考えのまとまらない混沌とした意識のなかで、彼が思った一つの解決策。

この目の前にある十字路に、車がきたのと同時に身を投げることに決めた。

他のことは考えられなかった。

もはやその選択でしか、自身を救えないという考えが頭を埋め尽くした。

もういいだろう。もう死のう。

そうして少年は身を投げた。

車の走行音と、ライトの眩さが目に、耳に焼きつく。

ああ、終わる。

これで。

「諦めちゃダメ　　！！」

億劫になってゆく意識のなかで、若い女の声が木霊した。

その声質は柔らかだが、力強い韻を踏んでいた。

そしてもう一つ、閑散とした自我のなかで少年は見た。

？赤く眩い輝き？を

「まだ生きているよ、マミ」

「見た所、どこも怪我をしていない……。君の魔法かい？」

猫とも、他の小動物のカタチに当てはまらない謎の白い生物は、金髪を二束にわけてカールさせている少女に訊いた。

「いえ、私はなにも……。あのままだったら、間に合わなかったと思うんだけど」

「この子、見滝原中の制服を着てる……」

「彼は生きている。どういうことだろうね。あの赤い光……。他の魔法少女の魔法かな？」

「その可能性が高いわね。轢きそうになっていたあの車……。どこにも無いんだもの」

「こんなこと、魔法じゃなきゃできないわ」

全体的に黄のイメージで統一された、西洋風のミニドレスのような

ものに身を包んだ金髪の少女の頭には、少し小さいサイズの黒色のベレー帽のようなものをかぶっていて、端に金に近い黄の色を湛えた宝石のような装飾具が着いていた。

「一応回復魔法をかけてみたけれど、本当にどこにも怪我をしていないのね？」

「うん。彼から少し話を訊いてみようよ」

「……う、あ」

金髪の少女に道端で看られていた少年がゆっくりと体を起こし、明晰ではない視界をいっばいに動かして、視界に映る二つの姿を捉えた。

一つは自分と同年齢か、少し上の金色の髪の少女。

もう一つは、猫のような白い存在。

「巻き込みたくないわ」

「今回は少し気がかりなことがあるんだ、ママ。彼には素質も何も無い。男の子だしね。話を訊くだけだよ」

「そうならいいんだけど」

目の前で起きている会話の内容が、少年にはまったく掴めなかった。

まだ少し、体の節々が痛みながらも立ち上がって訊いた。

「……えっと、誰ですか？」

見滝原に舞い降りた銀色の流星（後書き）

誤字脱字、その他諸々感想含め、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3419y/>

魔法少女と、よみがえる銀色の流星

2011年11月10日06時24分発行